二次元ぷち文庫

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた4

狩野景

挿絵／天鬼とうり

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

※本作はあとみっく文庫『目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた１～３』および『目覚めると拳銃乙女を護る美少女拳士になっていた』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた4

狩野景
表紙／天鬼とうり

二次元ぷち文庫

章乃序　鬼目覚メル刻　005
章乃壱　不穏ナル予兆　032
章乃弐　結女ノ戦イ　054
章乃参　鬼慰姫ト犬神ノ退魔師　103
章乃肆　無力ナル戦イ　159
章乃伍　折レタ刃　202
章乃終　失ナワレタユメ　241

章乃序　鬼目覚メル刻

「ふう、夜になったら少しはましになったわね。昼間は暑くて頭焦げるかと思ったわ。は～、シャワー浴びて冷房の効いた部屋でアイスクリーム食べた～い」
「たるんでいますよシスター・エイプリル、私たちは観光に来たのではないのですから」
「分かってるってばあ、こんな真夜中に遥か遠くインドくんだりで女二人、辛気くさい石窟の見回りするのも任務だってことくらい。シスター・マゼンダってば真面目なんだから」
ムンバイより東、観光地としてもよく知られたエローラの石窟寺院群にて、場違いな修道女姿をした少女が二人、薄暗い石造りの洞を巡っていた。
「だけど本当にいるの？　不死者……。こんな異教の土地なんかに」
柔らかな黄色の修道服を身に纏い、ソバカスを散らす色白の顔に人懐っこい笑みを浮かべるシスター・エイプリルと呼ばれた少女が、スレンダーな身体で落ち着きなく辺りを見回しながら軽やかな足取りで歩む。
「先月だけでも十四人の観光客が行方不明になり、捜索に向かった警官隊は襲撃に遭い、生気を吸い尽くされ死亡した後に自身も不死者と化しました。現在この施設は全面的に立ち入りが禁止になっています」

眼鏡を掛けた無表情な美貌で、パートナーの軽口に生真面目に答えながら、シスター・マゼンダと呼ばれた修道女が結構な巨乳の見事なプロポーションを、桃色がかった紅の修道服に隠す。

「だから昼間も全然人いなかったんだ～」

「……出発前にシスター・エイプリルも、私と一緒に説明を受けたはずですが？」

「ごめん、よく聞いてなかったから覚えてないや」

あっけらかんと笑うパートナーに、生真面目そうな修道女が諦めの溜息を吐く。

「それにしてもこの像、妙に迫力あるよね。東洋の神様はよく分からないけど、何だか悪魔みたいな姿のもいるし。これなんかいまにも動いて襲いかかってきそう」

壁面に掘られた仏像の中でもひときわ大きく、憤怒の表情を浮かべた一体に少し怯えた顔で後ずさる。

「異教の神を侮辱するのは、好ましくない行いだと思うのですが」

「べ、別に馬鹿にしたわけじゃないってば。あたしたちには馴染みがないなって思って。大決戦への援軍と引き替えに派遣されてこなければ、一生見ることもなかったかも」

東欧の険しい山々が連なる土地にて、三つの大きな勢力に別れて拮抗する不死者たちが全面的な戦いへと突入する予兆があった。

不死者討滅を使命とする教皇庁の異端審問局は、三つ巴の戦いで消耗した機を突いて三

勢力を一気に滅ぼすべく、全世界の退魔機関への協力を要請している。
退魔組織オーパス教団を快く派遣してくれたインド政府より、近頃エローラ石窟に出没するようになった不死者討滅の協力を請われ、二人の巡礼聖女が遣わされたのだ。
薄暗い回廊を奥へと進み、軽口を交わしながらも警戒を強めたその刹那、
「なるほど、なぜこのようなところに巡礼聖女がいるのかと思えば、そのような事情であったか」
「うわっ！　びっくりしたっ!!」
「その気配、不死者ですね？」
突然真後ろから声を掛けられ、慌てて飛び退き一瞬で戦闘態勢を取る。
いまのいままで何の気配もなかったのにどこから現れたのか、ひょろりと痩せた長身の男が、修道女たち以上にこの場にそぐわぬ燕尾服姿で不穏な気配を漂わせていた。
「いかにも我はいまは亡きリヒャルト・シュヴァルツ卿にお仕えした、ガストン・ボナールと申す者」
血の気の亡い陰鬱な顔を微笑のつもりかわずかに歪め、血のこびり付いた犬歯を唇から覗かせ丁重な言葉遣いで答える。
「リヒャルト・シュヴァルツ……。かつて真祖と呼ばれた原初の不死者三人の内の、漆黒と呼ばれていた一人ですね」

「さよう。その主亡き後、我は新たな勢力に加わることもせず、辺境の地にてこのように細々と暮らしておる。喰らう者どももそなたらにとっては護るに値しない異教徒だ。このまま見逃して立ち去ってはくれぬか？」

マゼンダの確認に懐かしそうな視線を宙に漂わせ、穏やかな声で懇願する。

「う～ん、大昔だったら異教徒って理由で見殺しにしちゃったんだろうけど、いまは人類みんな仲良く、信じる神が違ったって協力し合う時代だよ。だから、だーめ」

「いかなる場所であれ、清き乙女の血にて不死者を討滅するのが、私たちの務めです」

だがエイプリルもマゼンダも、一切応じる素振りを見せず臨戦態勢へ突入した。

「ほう、そうか……、では仕方ないなっ！　その穢らわしい処女の血を一滴残らず絞り出してやるぞ!!」

修道女たちの拒絶に落胆した様子もなく、むしろ嬉々として牙を剥き出しガストンが襲いかかってきた。

「見逃せといっておいてやる気満々じゃないのっ！　はっ!!」

鋭い爪を目にも止まらぬ速さで繰り出しながら突進してくる。

大きなバックステップで距離を保ちながら、エイプリルが手に持った連射式のボウガンを続けざまに撃ち込んだ。

「ふん、そのようなものっ！」

至近距離から続けざまに叩き込んだ金属の矢だったが、不死者の並外れた動体視力の前にあっさりとかわされる。

通常の攻撃ではそれほどのダメージを与えても復元してしまう不死者を倒すには、一度も男と交わったことのない処女の清らかな血液をその体内に注ぎ込む以外ない。

巡礼聖女は使用する武器に、自分の血液を注ぎ込んで戦うことで不死者を滅ぼす。

「この小娘がっ!!」

「ひぁあぁっ!」

矢を撃ち尽くし、あっという間に追い詰められたエイプリルが押し倒される。

「くくく、どうやらお仲間は逃げ出したみたいではないか。それならばお前も最初から立ち去っていれば見逃してやったものを。我らを滅ぼす厄介な純潔の血、そのまま喰らえば我とて助からぬ。だからじっくりと、女の楽しみを教えてから喰らってやろう!」

仰向けに抑え込まれたエイプリルの上から、濁った眼を好色に歪め、ガストンが修道服の裾を捲り上げてくる。

「イヤ〜ン、助けて〜」

下着を露わにされ危機が迫っているというのに、エイプリルはふざけた口調で笑顔のままイヤイヤをした。

「ふざけていては本当に処女を失う羽目になりますよ。私の武器が全ての敵に通じるわけ

ではないのですから」
逃げたはずのマゼンダが物陰から姿を現し、生真面目な口調で告げる。
「ぬうっ、うお、身体がっ⁉」
エイプリルの下着に手を掛けて股間をモッコリと隆起させた状態で、ガストンは一切動けなくされていた。
「シスター・エイプリルに意識を向けている隙に、私の鋼糸聖具をそちらの身体に巻き付けました。そんなにがんじがらめになるまで気付かない鈍さに感謝します、不死者ガストン・ボナール。それではごきげんよう」
「お、おのれええっ！」
両手の指から伸びた無数の細い鋼糸にマゼンダの清らかな血液が流れ込み、深紅に染め上げる。
直接敵の身体に巻き付かせるのではなく、石窟内へ複雑に張り巡らせたうえで敵の関節部分を重点的に締め付け、不死者の並外れた怪力を分散させている様が露わになった。
無表情な眼鏡修道女が両腕を引き寄せ、穢れを滅する処女血を含む糸を不死者の肉体へ食い込ませる最中、
「ぐぁあああああっ‼」
おぞましい呻き声を上げて新手の不死者が、マゼンダの背後から襲いかかってきた。

「くっ!!　従者!?」
ガストンの時代がかった装束とは違った現代的でカジュアルな格好は、襲われ不死者と化した旅行者なのだろう。鋭い牙を突き立てようと少女の首筋に噛み付いてくる。
「マゼンダ!!」
不意打ちを喰らって慌てる眼鏡修道女の危機に、ガストンの下から這い出したエイプリルが新手の不死者を、新たに矢を装填した連射式ボウガンで射る。
「ごぁあああっ！」
彼女の処女血が鉄矢から注ぎ込まれ、呪われた肉体が瞬時に塵と化して崩れた。
「た、助かりました、シスター・エイプリル」
「よかった、無事だった」
牙が首筋を貫く前に倒すことができ、陽気な修道女が安堵の息を漏らす。だがマゼンダの体勢が崩れた隙に、ガストンは緩んだ鋼糸から抜け出してしまっていた。
「ふむ、姑息な手を使う小娘どもが。犯し喰らってやろうと思ったが小便臭い処女娘など、従者の餌がふさわしい。ものども、存分に喰らうがいい！」
巡礼聖女から距離を取り、憤怒の形相をした大型の仏像に寄りかかりながらガストンが命じると、石窟の至る所から喰われて従者と化した旅行者たちが不気味な呻きを上げながらわらわらと現れて二人に襲いかかっていった。

「罪もなき人々に、このような冒瀆を。許しません!!」
「穢された御魂を主のもとへ。エイメンッ！」
人間を喰らうだけでなく死した後も貶める不死者への怒りを滾らせ、血糸が舞い、血矢が放たれ、従者たちを塵へと還し呪われた不死から解き放つ。
乱戦の最中、マゼンダの血糸がめり込んだ傷から朽ちた肉をぼろぼろとこぼし、ガストンが逃亡を計ろうとする。
「ああ、お前っ、逃げるなっ、待てっ!!」
「ふん、当たらぬといっているだろうが！」
エイプリルがボウガンを放つがやはりあっさりとかわされ、彼女の血液が注がれた矢は憤怒の形相をした仏像に突き刺さる。
「せっかく見つけた狩り場を手放すのは口惜しいが、無粋な小娘とじゃれ合うのは趣味ではない。さらばだ！」
従者たちを囮に、不死者が石窟を後にしようとしたその時、
「む……う……、忌々しい鬼繰師(きくりし)め……、よくも、俺を……」
大地を震わせるような重々しい呟きが、憤怒の形相を浮かべる仏像から発せられた。
「なにっ！　ひいっ、お、お前は……!?」
ガストンが驚き、振り返り見る。

石仏の眼が見開かれ、鋭い眼光で不死者を射貫いた。
血の気の失せた青白いその顔が、恐怖に強張る。
「え、何なの、あれ……」
「仏像……？　動いてる」
従者たちも巡礼聖女たちも、戦いの手を止めて唖然と眼差しを注ぐ。
ガストンに避けられ刺さった矢から処女の血を吸い込んで、石仏の表面が生気に溢れる肌へと変わっていた。
すでにそれは石の像ではなく、筋骨隆々とした長身に野性味溢れる顔立ちをした生身の姿。だがその頭部からは太く鋭い角が二本、天を突くように生え揃い、全身からは見ているだけで気力が萎えて平伏してしまいそうな圧倒的な気配が押し寄せてくる。
「封じられていたか……。どれほどの時を経た？　ぬう、まだ血が足らねえ！」
石窟内を見渡し、朦朧とした口調で呟くとその巨漢はおもむろにガストンへと襲いかかった。
「ごぁっ、何をするっ！　貴様、我を誰だと思って……いるっ、あが、あ、あああぁっ!!」
人間の能力を遥かに上回る不死者が一歩も動けず取り押さえられ、必死に藻掻くがその腕を払い退けられない。

「ぎひっ、あおっ、んぁああ、そん……なあ、あばっ、はばばばばばぁああっ！」
まるで脆弱な獲物を軽々と捕らえた猛獣のように、その巨漢は鋭い牙を生やした口でガストンに喰らい付く。
「う、うそ……、不死者を、喰らってる……？」
「何なの……、こいつ……。あぁっ」
「ふん、何という不味さだ。人間を喰らうよりも腹を満たせるのがせめてもの救いか」
驚愕する巡礼聖女の目の前で、二本角の巨漢は成人男性と同等の肉体をわずか三口ほどで全て平らげると不満げに顔をしかめる。
「これだけ喰らえば、当面の間は事足りる。さてと次は……」
しかも主を失った従者どもを、壮絶な速さで片っ端から喰らい尽くしてしまった。
「女ども喜べ、貴様らをこの鬼神阿修羅童子の側女としてやろう。存分に尽くすがいい」
不死者を狩る任務に就き、いままでにも人知を超えた状況には幾度も遭遇していた。
だが目の前で起きている信じ難い状況に、身動きもできずただ立ち尽くす巡礼聖女たちへ、鬼神と名乗った巨漢が命じる。
「わ、私が仕えるのは偉大なる主、ただ一人です！　はぁああっ!!」
「ば……化け物めぇえ、滅びろ！」
本能的な恐怖を呼び起こさせる圧倒的な鬼気に、全身を締め付けられているようだった。

それでも阿修羅童子の屈辱的な命令に怒りを震わせ、マゼンダとエイプリルが立ち向かう。
「えっ⁉」
「はうっ、そんな！」
血色の鋼糸は引き千切られ、鋼矢は払う手に弾き飛ばされた。
しかも一体何をどうされたのか、気がつけば二人とも服従を誓った獣のように這いつくばらされている。
「二匹ともいい尻をしているぞ。まずは肉付きのいいほうから味わうとするか」
「えっ⁉　あぁああっ！」
「あれって……、お、おちん……ちん……？」
胸の膨らみをへしゃげて上体を地面に押し付け、膝を着いて尻を突き上げた姿勢を強いられ、顔だけを後ろに振り向かせる。
その眼が、驚きと恐怖に大きく見開かれた。
好色な不死者と対峙し、いままでにも見せ付けられ、あわや貞操を奪われそうになったこともある、おぞましい男根。
巡礼聖女に取っては不死者を屠る力を奪う忌まわしい男の性器だが、鬼神の股間から急角度にそびえ勃った威容は常軌を逸した大きさだった。
節くれ立った赤銅色の幹に幾本もの青筋を浮かばせ、反り返った極太の先端は毒蛇の頭

えっちシーン試し読み ここからスタート！

部のようにエラ傘を開いて膨らみ、鈍く尖った先端から大量の汁を糸引いて先走らせる。
その先端が修道服の裾を捲られて露わにされたマゼンダの、肉感的な尻へと迫った。
「ひいっ、ああ、イヤぁああっ！　駄目ぇえ。そんなの、私はッ。ああ、不死者と戦えなくなるっ。巡礼聖女じゃなくなっちゃうっ、おぁあああああぁ～～～～～ッ!!」
必死に藻掻いて逃げようとするが、阿修羅童子の剛腕に押さえ付けられて起き上がることすらできない。
太い指にショーツが訳もなく引き千切られ、尻房の膨らみの奥で股間に縦筋を刻んだ女陰が露わになる。その割れ目へと為す術もなく巨根が押し付けられ、絶望の悲鳴が迸った。
「シ、シスター・マゼンダ!!」
「ひうっ!!　ンお、あ、あぐぅうぅっ、ああ、や、あ、痛いぃ！」
心配するエイプリルに救いを求める眼差しを注ぐ最中、潤んでもいない膣口を極太い感触が無理矢理に押し開き、みしみしと狭穴を軋ませて埋まり込んできた。
早速湧き起こる痛みに声を震わせ、せめてもの抵抗に身を強張らせるが、
ブチッ！　ずぶずぶずぶっ、ヌブブブブズブズブズッブンッ!!
「ひぎぃいいいっ！　んぉごっ、あがぁああっ、イィイッああっ、痛いぃいいっ!!　きはぁああっ、入って……来ちゃったっ、入られ……ちゃったぁああっ！」
何の気遣いをすることもなく、傍若無人に処女膜を突き破ると並外れた太さの怒張肉で

牝穴をいっぱいに埋め尽くした。

「あ、あぁぁ……もう、私、不死者を滅ぼせない……、主のお役に立てない……」

純潔を失えばその血は不死者を滅ぼす清純さを失う。もうこの瞬間より巡礼聖女として戦うことは不可能になる。激しい破瓜の痛みと膣を満たした極太の切迫感が疼く中、それ以上の悲しみに心が引き裂かれる。

「生娘か。心地良い締まり具合だ」

悲痛にくれるほど締め付けを強くしてしまう襞壁の感触に満足を示し、阿修羅童子は自分が快楽を得るためだけの、一切相手に気遣うことのない抽送を繰り出してきた。

「ひっ、いいっ、おあっ、やっ、あぅうぅっ、動いたらっ、んお、ああっ、や、やめ、はぅうぅっ、あ、あああっ、痛いッ、んはっ、あ、ああ、はぅうぅうっ!!」

純潔を奪われた悲しみだけでは終わらない、さらなる屈辱と苦痛をもたらされマゼンダの喉から、悲痛な喘ぎが絞り出された。

まるで性欲を満たす道具を使うような、激しく一方的な突き込みに摩擦を和らげようと大急ぎで膣穴が愛液を分泌させる。

ずぶっ、ぐちゅ、ぬちゅ、ぬぶぬぶずぶっ、ぬずずっ!!

「ふぁあっ、あうっ、い、いやぁあぁ、こんな……の、んお、あ、はぁああっ、いやぁあ
あっ、とめ……あっ、やめて、あっ、あっ、あぁあっ、当たって、る、んはぁっ!」

いままで一度も男を受け入れたことがない繊細な壁襞を無遠慮な極太に刮げられる苦痛は幾分和らいだが、その分ヌルヌルの擦れ合いをもたらされ、悩ましく熱い刺激が身体を蝕み始めた。

「シ、シスター・マゼンダ……？」

長い怒張の先が穴の奥を弾き上げる度、息が詰まるような衝撃が腹腔に響いて上擦った喘ぎが漏れてしまう。眉根を寄せた切なげな表情で身をくねらせる様に、エイプリルが不思議そうに顔を覗き込んでくる。

「ち、違う、私はこんなこと、ふぁあ、あん、はぁっ、んひっ！」

羞恥に顔を真っ赤に染め、何を聞かれたわけでもないのに慌てて否定するその間にも、子宮を怒張の先っぽが突き弾き、愛液にぬめった極太がみっちり密着した狭穴の壁と擦れ合うと浮き上がるような甘美にどうにもできなくなる。

「奥を突き上げられるのが好きなようだな。初めてでもうそれだけ感じるとは、素質があるぞ」

「ち、違うっ！　こんな……の、感じてなんか、あふっ、はひっ、ふぅあああっ‼」

鬼神に指摘され抗おうとするが、膣内で男根が暴れるともう駄目だ。

「や、やめろお、シスター・マゼンダにこれ以上酷いことをするな！　変なことしたいなら、あ、あたしにしろぉおっ‼」

涙をこぼし恥辱に嗚咽しながらも、湧き起こる甘美に喘いで身を捩らせてしまうパートナーに、エイプリルが勇気を振り絞る。
「それほど俺のものが欲しいか？　少し待て、いまはこれで我慢しろ」
「ち、違う……ひあっ!!　や、あああぁっ、触る……なっ、あああぁあっ！」
男根を欲したと誤解した阿修羅童子の太い指先が、エイプリルのショーツを引き下ろし女陰を勝手にまさぐり始めた。
「そんなところっ！　ひぁああっ、イヤッ!!　やだっ、あっ、あぁあああっ！」
太い指が秘花弁を押し開いて、鋭敏な割れ目の粘膜を粗雑に掻き回す。優しさの欠片もない鮮烈な刺激に背筋を反り返らせ、元気少女が這って逃げようとする。しかし、
「お前も生娘か。ならば十分にほぐしておくとしよう」
「ひあっ！　だめっ、入れちゃッ、あ、あ、あぁああっ!!」
鬼神の指は膣口にめり込んできて、固く窄まったその狭口を広げるように掻き回した。
「ふああっ、そんな、あ、あああぁ……」
処女膜が破られるほど深くまで押し込まれてはいないが、巡礼聖女にとっては命に等しい純潔の危機にさらされ恐慌に陥る。なのに悩ましい未知の刺激にヌメったしずくが湧き出して、くちゅくちゅと淫靡な音色を奏でさせる。
その一方でマゼンダへのストロークは激しさを増し、初めて男根を受け入れたばかりの

初々しい襞を刮げていた。
「ひぉおおっ、んあぁあっ、だめ、こんなの、あぁあああっ、おかしくなるうっ!! イヤなのにぃい、痛いのにぃいっ! ふあ、あ、ああっ、こんな、こんなぁあっ、主よ、あ、ああぁ、主よ、お許しをおおっ、ふあ、あぁあ、私ぃい、ん……はぁあっ、ンイィイイッ」
天の神に身も心も捧げた修道女でありながら、並外れた剛直竿に奥壺を荒々しく弾き上げられ、禁断の快感を覚えてしまっている。
「ほう、なかなかよい錬気(れんき)を溢れさせてくるな。しかも突き込むほどに締め付けを強くして俺の精を求めてくる」
ぬぶっ、ずぶずぶずぶんっ、パンッ、パンパンパンッ!
「ひあっ、違うっ。私、こんなっ、こんなことぉ、あ、ああっ、はぅううっ!!」
否定しようとするが、ストロークが勢いを増すほどに、膣穴は阿修羅童子に指摘された通りキュンキュンと窄まり、乱打される子宮から濃度を増した蜜が溢れ出て擦れ合いの心地よさを際限なく高めてしまう。
「気に入ったぞ女っ! 俺の精にて孕み、側女として仕えろっ!!」
「ひぁああっ、しゅごぃいいっ!! んおっ、あ、あぁあっ、太いの、あ、あぁあぁっ、膣内ぁあ、めちゃめちゃに、あひ、あああぁ、ふぁああ、ますます太くぅうっ、んあ、あ、あぁあああっ、だめっ、はひっ、ビクビクしてる、私の中でっ、あ、あぁあああぁっ!」

抑えようとしても修道女にあるまじき淫らな喘ぎをこぼして悶えてしまうマゼンダに、抽送がどこまでも勢いを増す。

重々しい衝撃で子宮壺を追い詰めながら受精と服従を命じ、阿修羅童子の怒張肉が激しく脈打ち勃起を増す。

「いまから、俺がお前の主だっ！」

どびゅううっ、びゅるびゅるびゅる、ぶびゅびゅびゅびゅるる～～～～～～ッ‼

「あひいっ！　ひゃわぁあああっ、出てるッ、あぁあああぁっ、私の中にいい、ふあ、あ、あぁあぁっ、熱いの、おぁああ、激しいの出てるッ‼」

窄まる膣壁を押し広げて膨張した陰茎から、脈打ちと共に怒濤の勢いで灼熱の濃厚液が迸り、マゼンダの子宮を打ちのめした。

「んあ、あぁぁっ、当たってるぅう、奥ぅうっ、いっぱい、ふぁああ、染められるっ、あ、あああぁっ、私ぃい、主よ……、は、あ、あぁぁ、助け……あ、あぁぁ、はううっ、ん……あぁっ、イクッ‼　くぁあぁぁ、イクゥウウウゥ～～～～～～～～～～ッ！」

牝壺をいっぱいに満たし、膣襞の隙間にまで染み入った濃厚な精液から、圧倒的な鬼気が膨れ上がり修道女の肉体はもちろん精神までも汚染してゆく。

もう二度と主の前に身をさらせぬ穢れへの絶望と、漆黒の甘美に満ちた堕落への悦びが、灼熱に満たされた子宮から膨れ上がり胎動のように脈打ち始める。

「ふ、あ、あぁぁ、私……私ぃ、巡礼聖女マゼンダ・ガラハンディルは、あぁぁ、阿修羅童子様にぃ、身も心も全て、あ、あぁぁ、捧げますぅう。ふあ、ああ、おちんちん、んぃいいっ、奥まで太いのいっぱい、あ、あぁぁぁっ、ン……イィイイッ!!」

絶頂の余韻に震える声で、堕落の巡礼聖女が鬼神への忠誠を誓った。

精を放ってますます太さを増した怒張で、膣を満される快感にもう一度達する。

「シ、シスター・マゼンダ? どうしたの、なんで、あ、あぁぁっ、そんな、ん、あぁ、ことをッ」

四つん這いで陰茎を膣に咥え込んだまま、悩ましい喘ぎを上げて鬼神に屈する同僚に、膣口をほぐされながらも必死に耐えるソバカス顔の巡礼聖女が驚きの声を上げた。

いつも生真面目で信心深い彼女が、主以外に膝を屈するなんてあり得ない。

だが怒張を引き抜かれて悩ましい喘ぎと共に打ち震えるマゼンダは、眼鏡の向こうの切れ長な瞳を淫靡に濁らせてエイプリルの顔を覗き込んできた。

「シスター・エイプリル、貴女も早く阿修羅童子様のおちんぽに、処女を奪われてしまいなさいな。激しい中出し射精で子宮を満たしていただければ、誰が真の救世主なのかはっきりと分かりますからぁ」

自ら乳房を揉み拉げ、悩ましげに腰をくねらせて恍惚の口調で囁いてくる。

「な、何言ってるのさ、処女を失ったらあたしたちは戦えなくなるじゃないっ!! それに

そんな主に背くようなことをっ！　ふぁあっ!!」
生真面目な修道女の冒瀆的な発言に驚くエイプリルの這いつくばった身体が、鬼神の剛腕に軽々と抱え上げられた。
「心配するな小娘。いまよりも遥かに強い能力を、この俺が与えてやろう」
「ひあっ！　い、いやっ、あぁああっ、だめっ、入れたらぁあっ、だめぇえええっ!!」
開帳させた両脚を鬼神が背後から抱え上げ、マゼンダの絶頂液と白濁汁を纏った怒張竿を膣穴に押し込んでくる。
「くふぅうっ、あ、あぁああっ、そんなっ、ひぎっ、イ、痛っ、あ、あぁああっ、来ちゃうっ、入って……っ、いぎぃいいっ!!　おあぁああああ〜〜〜〜〜っ！」
ぬっ、ぶっ、ずぶっ、ずぶぶ、ぶぢンッ!!　ズブズブズブブッ！
マゼンダの時同様に、痛みに呻いても一切容赦することなく、猛る怒張が処女膜を突き破り一気に奥へと目掛けて膣穴を押し広げて埋まってきた。
「あぁああっ、ぐぅうう！　入れられちゃったっ!!　あたしも、あ、あぁあっ、不死者を倒す力ぁあっ、なくなっちゃったっ！　ひあっ、あ、あああぁっ」
抵抗を示すことすら許されない。全てを捧げた使命を呆気なく台なしにして、激しい痛みが走る狭穴を圧倒的な存在が満たす。
「太いのに突き破られて痛いでしょ？　でもあとは気持ち良くなるばかり。シスター・エ

イプリルもすぐに、阿修羅童子様にお仕えする真の悦びを得られるから、全てを真の主に委ねなさい……」

「く……うぅ、ああぁ、目を覚まして……、マゼンダ、あ、あぁぁっ。あたしたちが仕える御方は偉大なる救世主、んぅう、ただお一人、あ、うぐぅ……。あたしは、こんなこと、はひっ!!　ふぁああ、やめてぇえ、マゼン……ダぁああっ」

堕ちた同僚を正気に返らせようとするが、彼女はエイプリルの胸元をはだけさせ、小振りな乳房に舌を這わせてきた。

「んむ、ちゅぱ、はむ、れろろ、ちゅぷちゅぷ、ちゅるる～、ふぁあ、エイプリルってば、お乳小さめなのに、ああぁ、乳首もうこんな固くして。感じやすいのね……、ん……あふ」

「ひうっ、そんな……ことを……あ、ああぁ……」

生真面目で知られる彼女の破廉恥な行いに驚きながら、巧みな舌使いで過敏な小粒乳首を転がされ、小さい分だけ感度の高い膨らみを指先で捏ね回される。

「案じるな、すぐにお前も俺の精で染め上げてやる」

困惑しながらも、ソバカスが斧修道女が乳房に沸き立つ甘い快感に身を捩らせる。その耳元へ背筋が凍るような声で告げながら、阿修羅童子が激しい抽送を繰り出した。

「ひううっ!!　おあっ、あ、ああぁっ、や、ああ、動いちゃ、い、痛いぃい、ふあ、だ、め、ああ、動いてるぅ、擦れて、は、あ、ああぁっ、いやぁあああっ！」

やはりマゼンダの時と同様に破瓜したばかりの膣を一切気遣わない、男根の感触を刻みつけるようなストロークがキツく窄まる膣壁を容赦なく刮げる。
「お前の穴も心地良く締め付けてくるぞ。巡礼聖女といったか？　貴様らの仲間はみなこのように具合が良いのか？」
「ひぁああっ、知らないぃいっ、そんなの、あ、あぁああっ、知らないもんっ」
二人の牝穴が余程気に入ったらしく、上機嫌で突き込みを勢い付かせながら鬼神が尋ねてくる。
「あはぁ、阿修羅童子様ぁ、私たちはどれほど情欲に身が火照ろうとも、一切の交わりを禁じられて参りましたからぁ、あなた様のご立派なおちんぽに戒めを破っていただき、嬉しくてキュンキュン締まってしまうのですぅ、あは、ああぁっ、また私にもくださいませぇ」
純潔を奪われた絶望に苛まれながら、痛みが疼く穴襞を激しく乱され答えることができないエイプリルに代わって、マゼンダが愛液を滴らせながら求める。
「案ずるな、これから幾度でもお前たち二人に伽を務めさせてやる」
「ふあっ、あ、ああぁっ、阿修羅……さまぁ、嬉し、い、あ、ああぁっ!!」
マゼンダの膣に指を深々と差し込みながら、鬼神がエイプリルへの突き込みを激しくする。
「ひぃいいっ、んっ、あぅうぅっ、あぁああはああぁっ、そんなの、あ、あぁ、いやぁ

あ。こんなことぉ、あ、ああっ、いやっ、もう、あああぁっ、やめ……ッ、ふぁぁぁあああっ！」

感極まって同僚の微乳にしゃぶり付きながら、腰を繰り出して自ら鬼神の太指を膣奥に咥え込むマゼンダと対照的に、エイプリルは挿入から逃れようと身を暴れさせる。

「ほう、早速積極的に腰を使い始めたか。しかもますます襞を絡み付けてきている」

ズボズボズボッ、ヌブッ、ヌブッズブッ、ズンズンズン、パンパンパンパンッ！

「ひぁあああっ、やぁああっ、だめっ、そんな、あああぁっ、激し……あっ、あぁあっ、はひっ！　当たってるッ、んおぉお、奥ぅうぅッ、ふあ、あ、当たってるぅ、あっ、ああっ、こんな……ああっ、あたしぃ、ふぁあ、こん……な、あぁあっ‼」

嫌がる動きがますます刺激を強め、阿修羅童子のストロークを激しくさせた。

分泌を増す愛液に擦れ合う感触がヌメリを得ると共に、重々しい衝撃が子宮を見舞う。

「ふぁあっ、こんな、あぁあっ、奥にッ、んぁあっ、来てるッ、すごいの、あ、あぁあっ、だめっ、ふぁあ、激しすぎぃ、あ、ああっ、こんな、ああ、こんなぁああっ！」

マゼンダの膣をまさぐるため身体を支える鬼神の腕が一本になり、その分体重がモロに結合部へかかって男根の衝撃が伝わってくる。

処女を失った痛みの渦巻く膣にはますますつらいはずなのに、何故だか悩ましい感覚が沸き立ち身体を火照らせる。

「ン……んぅうぅっ、は、あぁあっ、これ……ぇ、こんな……、あぅうっ、ふぁあ〜〜」
喘ぐ声に媚びるような上擦りが加わり、溜息をこぼしながら身を震わせる。
「ほらぁ、シスター・エイプリル、だんだん気持ち良くなってきたでしょ。太いおちんちんに奥をコンコンされて、女の子の快感、湧き上がってきちゃってるぅ」
「ひあっ⁉　ち、違……ッ、んふっ、ふあ、あ、あああっ、そ、そんな……、あたしは……あ、あああっ、こ……こんなの、こんなの違う、ふぁああ〜〜〜んっ‼　あぁあっ」
反応の変化をマゼンダに指摘され慌てて拒むが、気付かされてしまった快感をもう無視することはできない。ぐりんと子宮口を押し広げるような亀頭の当たり具合に、蕩けた眼差しで嬉しそうな喘ぎを上げてしまう。
「さあ、シスター・エイプリル、んぅ、あ、あああ、その快感全てを委ね……て、ふぁあ、阿修羅童子様が、はぅ、あ、あはぁあぁっ、導いてくれますから……。い、いいいっ、指で、膣内ぁ、い、いいいいっ！」
エイプリルへのストロークに同調して勢いづく指使いに膣壁を穿られ、シスター・マゼンダがぐちゅぬちゅと愛液の音色を響かせて快感に昂り、道連れにしようとエイプリルの乳房を大胆にねぶる。
「ひっ、あ、ぁああっ、んぉおおっ、はぁあぅうううっ‼　あっ、あ、あぁあっ、やぁあっ、お乳ぃ、駄目ッ、あううっ、奥……ッ、ふぁああ、もっと、あ、あぁっ、だめ

っ!!」

微房のくすぐったい甘美に煽られながら、痛みよりも存在を増す子宮への狂おしい快感にもう取り繕うこともできず嬌声を上げてエイプリルが悶える。

「俺の側女になりたくて仕方がないようだな。迸りを欲しがって、奥が先っぽに吸い付いてきているぞ」

「あひっ!? そんな、違……うぅ、あたしは、そんなの、あうんっ、あ、あぁぁっ、だめ、ひぁあぁっ、奥ッ、そんなにする……からあっ、あたし、あ、ああっ、あたしぃ。あたしの主は……、あ、ああっ、だ……めっ、はぁあぁあっ!」

ヌブンッ、ズブンッ! ズンッ、ズンッ!! パンッパンッパンッパンッ!

膣穴はすでに射精を急かすように極太怒張に絡み付き、子宮口が鈴口に吸い付いてきているのに、喘ぐ声でまだ抵抗を試みようとする。

「それほど俺の逸物が気に入ったか。締め付けて根本から搾ってきているぞ」

だが突き込みを激しくされると、ますます女陰は快感を欲して襞を波打たせながら収縮しっぱなしになった。

「違……ぁあぁっ、くあ、ああっ、はぅうっ! また中……で、大きくぅ、んおぉあぁっ! ふあ、だめっ、あ、あ、あぁあっ、だめぇえ、や、暴れてるッ!! 奥ッ、あぁあぁあっ、揺さぶられちゃ……ふあ、そんなにっ、あ、ああっ、だめぇえっ!」

締め付けに応えて怒張が勃起を増して激しく打ち震えた。禁断の予兆を感じ取り巡礼聖女が怯える最中、灼熱の迸りが肉鏃の先端から一気に溢れ出た。

「出すぞ、お前の欲しがっているものをっ。俺の射精をたっぷりと味わえ！」

「はうっ、いやッ。ああっ!!」

どびゅうううっ、びゅるびゅるびゅるっ、ぶびゅびゅびゅるるるるぅうううっ！

「はぁあああぁうううっ！　あ、あぁああっ、熱い……のっ、あぐぅうっ、いっぱいっ、ふぁあああっ、いっぱい奥ぅ来てるぅうっ。んあ、あ、あぁあっ、こんなのっ。ふぁああっ、こん……なの、こんなに、中にぃいいっ、あっ、あ、あぁあああっ!!」

激しい灼熱の奔流が牝穴の底を打ちのめして子宮へと押し寄せ、問答無用の快感を悦びをもたらし一気に壺内を満たす。

「ひ……あ、ああぁあぁ、こんな……気持ち……いい、なんて、イケナイ、ことなのに……、あ、あぁあっ、あたしの中ぁッ、射精に、んぁああっ、気持ち良く、されふぁあああっ、あ、あぁあっ、イク、おぁああイクぅうううううぅッ！」

純潔を奪われた挙げ句、鬼神の精を子宮へと注がれて味わう絶頂に、心が鬼気に染められた。愛嬌のあるソバカス顔を快楽に呆けさせ、汗ばんだ身体中から堕落の瘴気を漂わせ幾度も押し寄せる絶頂の波に身を震わせる。

「ふあ、あ、あぁあぁ、ありがとうございますぅ、阿修羅童子さまぁ。んあああ、子宮いっ

ぱいの射精……あ、あぁぁ、収まりきらなくて、んおっ、あはぁぁ、もったいないけれど、溢れちゃうぅ。ふぁあぁぁぁ……」

絶頂の余韻に酔いしれながら、シスター・エイプリルが悩ましい声を震わせて膣内射精への悦びを告げる。

「あはぁ、シスター・エイプリルも阿修羅童子様の精をいただいて、どなたが真の救世主なのか悟ったのね……」

抱擁を解かれ、怒張の抜け出た潤み穴から白濁を滴らせて跪く修道女の姿に、マゼンダも並んで膝を着き、全く勃起が衰えず屹立し続ける鬼神の剛直をうっとりと見詰める。

「うん、あたしの主は、阿修羅童子様ただ一人だから。あたしは、阿修羅童子様の太いおちんぽにご奉仕する側女だから。ああ、あたし巡礼聖女エイプリル・ワインは、真の救世主阿修羅童子様に、身も心も捧げます。ん、ちゅぱ、ぺろ、はむ……ん、あむ……」

「ふぁあ、阿修羅童子……さまぁ……ぱく、あむあむ、じゅるる、ずりゅ……」

恍惚の表情で鬼神に忠誠を誓い、愛液と精液が入り混じった白濁をべっとりへばり付かせた勃起怒張に唇を当てて舐めしゃぶる。

そのエイプリルの隣でマゼンダも一緒に、極太竿を美味しそうに舐め清め始めた。

「しっかりと味わい、良く仕えるがいい、我が側女たちよ」

腰をくねらせ、ペニスを頬張るうちに二人の頭から小さな二本の角が生え、唇からは鋭

い犬歯が覗く。

「俺が封じられてから、かなりの時が経ったようだな。鬼繰師の長め、人の身ではすでに命は尽きているだろう。しかし感じるぞ、この匂い、この気配。我ら鬼族を魅了する鬼慰姫（オニナグサムヒメ）の香気。一条牙（いちじょうさえ）、貴様の代わりに子孫の錬気、その血肉ごと喰らってやる」

巡礼聖女たちの奉仕を受けながら、遥か遠く東の彼方から微かに漂ってくる魅惑の気配に、阿修羅童子は身を震わせた。

心がいくら嫌悪感を抱いても、鬼神と化した肉体は快楽を求めて反応してしまう。
「違う、こんなの、あたしのじゃ……ない。あぁあああっ!!」
陰唇襞をぬめらせる愛液と競うように浅ましくカウパーを先走らせる陰茎を嘆いていると、その切っ先が熱くぬめった感触に包まれる。
「んふっ、あはぁ、ハマった途端、ビクンって気持ちよさそうに反応してきた」
「ひあっ、やめ……てっ。あぁああっ、こんな、こと、くふっ、は、あぁあっ、あぐっ」
潤んだ割れ目を切っ先に密着させたまま、潤滑液にまみれた粘膜同士を擦り合わせるように滑らせて希美乃の亀頭を膣口に導く。
ヌプっとはまり込んだそのままに、夜叉童子はますます腰を沈めて勃起した竿肉を膣内に咥え込んでいった。
「は、あ、あぁぁっ、押し広げ、られる。綺麗な形して、羅刹のおちんぽぉ、大きいから。イッパイに太いの、お、あ、あぁあぁっ、中ぁ、満たされるぅう。あひぃいんっ!」
「くぅうぅっ、あ、あぁあぁっ、そんなっ、あたしのじゃないのにぃ、こ、こんな気持ちいいいっ。なんで、気持ち……いいっ、あふぅうぅっ!!」
亀頭がヌルリとめり込んだ途端、熱い穴壁が熱烈に締め付けてきた。海綿体を圧迫される甘美に息を詰まらせていると、濃密な愛液のヌメリが狂おしい擦れ感を加味してくる。
「奥にぃ、来るぅ、深いところにまで、あ、あ、あぁあぁっ、羅刹のおちんぽっ、たまら

えっちシーン 読み読み ここから スタート!

ない、あ、あああぁっ、んはぁあっ！」
「ひゃうんっ!!」
嫌でも膨れ上がる誘惑的な快感に男根を支配され、されるがままになっていると夜叉童子はますます悶えながら腰を沈めて、根本まで希美乃の勃起肉を膣穴に収めてしまった。
切っ先が穴奥に達して子宮をコツンと弾いた衝撃で、締め付けっぱなしの膣襞が激しく脈打ち絡み付きを勢いづかせる。
慣れない男性的な快感に驚きながらも、つい腰を迫り上げて夜叉の膣奥をさらに深くまで突き上げてしまった。
「くはぁあっ、あ、あぁあぁっ、子宮ぅう、ズンってされたわぁ。入れて早々、そんなされたら、うち、もう、止められへん！　はうっ、あぁっ、おぁあああっ!!」
「ち、ちがうっ、いまのはついっ。ふぁあ、だめぇえっ、あぁあああっ！」
思いがけない刺激に歓喜した小柄な鬼神が、喜び喘いで激しく腰を繰り出してきた。
ぬぶっ、ずぷっ、ぶぢゅ、ぬずんっ、ぐちゅ、ずちゅ、ぬぷ、ぬぷ、ぬぷぬぶずぶっ!!
「あひっ、はぁあっ、んひぃいっ、いい、あ、あぁあっ、これ、え、ああっ、ぬりゅぬる擦れ合う感じ、いいけど、おあぁあっ、奥にゴツンゴツン、キツいのイッパイ当たって、あぁあああっ、息詰まるほど、気持ちええわぁっ」
「こん、なあ、んくぅうっ、だめ、なのに、ヌルヌルの締め付けっぱなしで擦れてくるからっ。

い、いやあ、ますます変なところッ。あたしのじゃないところ、あ、あ、あぁっ、駄目な感じに、なっちゃうぅうっ！」

前世なんか知らない。生まれてから正真正銘女として生きてきたし、女の子を性の対象にしたことなんかなかったのに、前世の身体の男根で鬼神女と交わって快感を覚えてしまっている。

「凶暴な悪鬼のイボイボチンポも、あひぃ、いいけど、こんな太くて長いのにツルツルの綺麗チンポも、蕩けそうな擦れ具合で、ふあぁぁっ、いいっ。これなら、はぅ、んぅうぅ、転生した、明日香の身体で、処女奪われても、かまわんかった、かもぉ、はぅンッ」

凹凸に乏しい分だけ滑らかな陰茎の擦れ具合に、腰使いを激しくさせて童顔の鬼神が昂る。

「そ、そんなにぃ、勢い、強くされたら、ふあ、あ、あぁあぁっ!! だめっ、奥からっ、おあっ、あ、はぅうぅっ！ 何か、込み上げて……ああっ、来ちゃうっ!!」

ペニスに気持ちいい刺激をもたらされる度に、耐え難い衝動が触れ上がって海綿体を切迫感で満たしてくる。

「くひっ、おちんちん、ビクンビクン脈打つの、激しくなってきてるで。もう出そうなんやね？ うちの中ぁ、気持ち良くて、射精、しちゃいそう、なっとんのやね？」

「違……うぅうっ、そんなの、あ、あぁあっ、あたし、しない……もんっ。女の子、なん

だからっ‼　だから、こんなの、やめっ、ひぅううっ、んあぁぁっ！」
女なのに男のものがあるなんて我慢できない。そのうえ、射精なんて冗談じゃない。
気を緩めると一気に逝ってしまいそうな放出欲に、括約筋を引き締めて堪えるが、海綿体の切迫感が増して感度が高まり、膣襞とのヌルヌルの擦れ合いがなおさら狂おしくなる。
「気が強くて、ん、あぁぁ、意地っ張りで、あふ、は、あぁぁぁ、羅刹とぉ、ふあ、ん……あぁぁ、全然性格、あひ、あぁぁ、違うんやな～」
希美乃に跨がって腰を熱心に上下させ、喘ぎ声の悩ましさを増しながら、夜叉童子が希美乃の反応を面白がる。
「だからぁっ、あたしは、坂谷希美乃ッ‼　鬼神なんかと一緒にするなぁあっ、んぅうっ、も、もう、こんな、のっ、はっ、はうっ、あぁあっ！」
前世なんか知ったことじゃない。こんな身体を早く元に戻して欲しい。
だけど射精の衝動はますます強烈になり、鋭敏さを増した勃起竿を夜叉童子の膣襞が容赦なく甘美に締め付けてくる。
「遠慮、せんと、うちの膣内に、出して、んはぁあっ、え、ええんやで。羅刹の、濃いの……たっぷり、奥まで、あ、あふぁあっ。ほら、おちんぽはもう出したくてたまらなくなって、また大きく……んぅう、膨れて、うちの穴ぁ、押し広げてるのにぃ」
込み上げる感覚を覚える度に陰茎の充血が増して、大きさと共に感度を倍増させた。

また一段と高まる擦れ合いの刺激に陶然となりながら、夜叉童子が勢いを緩めつつ、締め付けた膣穴に男根が扱かれる感触をじっくり味わわせるような腰使いに切り替える。
「んぅううっ！　はぁああっ、だ、だめぇえっ‼　いや、あ、あぁああっ、そんな、の、あ、あたしぃ、ふあ、あ、あぁああっ！」
ぬめった襞がペニスを握り締めて心地良く扱く感触を濃密にさせながら、射精寸前にまで追い詰めた刺激は物足りなさを覚えるほどにされて、希美乃の腰が自分から跳ね上がってしまう。
「んひぃいっ！　あはああっ、すご……いぃい、ズブンって、激しいの、あ、あぁああっ、きたっ‼　あひっ、ふ、あ、ああぁ、んふううっ！　あぅう、これ、ふぁああっ‼」
「はぅうう、だめ……なのに。こんなの、あたし、したくないのにぃ。あ、ああ、止まらないっ。止められないぃいいぅっ！」
ずぶ、ぬぶっ、ぬぶずぶっ、ずむん、ずぶずぶっ、ずぽずぽずぽっずぽずぽんっ‼
物足りなくされた男根の衝動に抗えない。だめだと思いながらも、夜叉童子の腰を両手で抱え込んで、締め付けまくりな女陰へ下から突き込みを繰り出してしまう。
「あひっ、はっ、あぁああぁっ、またビクンビクンしながら、お、あ、あぁ、大きくなっとるん、ちんぽっ、羅刹のおちんぽぉおっ。太いのぎょうさん擦れて、おぁああ、子宮ズンズン来るわぁあっ！　あひっ、いぃいいいっ、羅刹の、あ、あぁあ、ちんぽいいッ」

夜叉童子も子宮を乱打される快感に、すぐ腰使いを激しくさせてさらなる甘美を貪欲に貪る。

「あぁあっ、こんなのぉ、あたし女の子なのにっ、おちんちん気持ちよくなっちゃってるぅうっ！　腰動くの、止められないっ。なんでこんなに、あ、あぁぁぁっ、だめなのに、男の……部分が、もっと気持ち良く、なりたがっちゃうの⁉」

快感の強さだったら女の部分のほうが遥かに大きいのに、男の部分で味わった刺激に男の衝動が猛り狂って抑えられない。

ずぱんっ、ずぽんっ、ぬっぢゅぐびゅっ、ずぱずぱずぱずっぽん、ずぽんっ、ぬっぶんっ、ぶじゃぬぶ、ずぽっ、ずぽっ、ずぷぬぷずぶぬぶっ‼

「ひぅんっ、お、あぁあぁぁっ、変な音ぉ、しちゃってる。あ、あぁあぁぁっ、濡れた穴に、おちんちんッ。太いちんぽが出たり入ったりして、いやらしい音、なっちゃってるうっ！　こんな……のぉ。ふぁあああああっ、はぁあああああぁっ‼」

これまでの受け身の快感に、自分から突き込む刺激が加わって勃起肉が狂おしい甘美に満たされた。ドクドクと海綿体を振動させる脈打ちに煽られて、切迫の衝動が尿道に押し寄せる。

その放出欲をはぐらかすように、ますますストロークを勢い付かせて子宮を乱打すると、華奢な鬼神が童顔を淫らに呆けさせて痙攣と共に喘いだ。

「ひあっ、あぁあっ、イイ、これぇ、もう、イキ、そぉおおっ!!」
（イヤらしいかお、してる。鬼ぃッ。これ……に、あたしの、おちんちん、に、奥苛められて、こんな……顔で、感じてるッ。鬼がっ、ああっ！）
夜叉の乱れ顔を自分の陰茎がもたらしているのだと意識した途端、全身を震わせる大きな鼓動と共に、奔流が堰を切り尿道を灼熱に染めた。
「くふぁああっ、あたしも、あ、あぁああっ、イクッ!!　おちんちんで、あ、あぁああっ、射精イクぅうううううっ！」
どびゅうううっ、びゅるびゅるびゅるるるっ、びゅばっ、どぴゅぴゅぴゅうううっ!!
堪えていた射精が怒濤の勢いで溢れ狂い、夜叉童子の子宮壺をこれでもかと激しく打ちのめした。
「ひあぁああっ、熱いの、お、あ、あぁああああっ、あ、あぁああっ、当たってるぅうううっ羅刹の、精子ぃい、んふぁあ、いっぱい、子宮、中ぁあ、入って……きた、んあ、はぁああっ。これで、羅刹の記憶……。ひぁあああああっ、んぁ、イクッ、ふぁああ、あ、おあ、あふぅうぅッ、んあ、あ、あはっ、イク～～～～～～～～ッ!!」
奥壺の中にまで流れ込んできて膣内を満たした白濁に、乱れた顔を感極まらせ夜叉童子が絶頂に達した。
小柄な身体をガクガクと震わせて甘美の嬌声を張り上げながら、男根を目一杯咥え込ん

だ穴口から収まりきらない濃密飛沫を噴きこぼして、希美乃に口づけをしてくる。
「んむっ、ふあ、あ、あああぁっ！」
慌てて拒もうとしたが、唇を割り開いて滑り込んできた夜叉の舌に導かれるように、渦巻く鬼気が鬼神と化した身体に注ぎ込まれた。
肉体を染めてゆく異質な力を得て、心の奥底に押し込められていたものが、強固な戒めを解き放ち急激に浮上してくる。
（こ……れ……、あ、ああっ、何なの……？　頭が、く……あ、ああっ、割れるように、痛い……。違……う、これ……、あたしじゃ、ない。あたしは、あ、あ、あぁあっ。駄目、希美乃のままで、いたい。思い出したく、ない、のに、あ、あああああっ‼）
それは気が遠くなるほど長い時の間の記憶だった。
人にあらざる鬼として人を喰らい、悪行を働いてきた、鬼神羅刹童子の膨大な記憶が、希美乃の頭に無理矢理押し入ってきて人間の少女として生きてきたこれまでの記憶と混ざり合う。
圧倒的な情報量の前に、人としてのちっぽけな記憶など押し流されてしまいそうで抗おうとするが、それもほんの束の間だった。
「思い……出した……。ああ、そう、何もかも、全て……。わたし……は……、涅哩底王羅刹……、鬼神、羅刹童子」

「は、放して！　伊音くんが死んじゃうっ!!」
動転する余り錬気が乱れ、男の姿になることもできず藻掻くが、鬼を払い退けることはできない。
「この傷じゃ助からないわねぇ～」
「阿修羅童子様に逆らうから、このような報いを受けるのです」
「あんたも観念して、阿修羅に従いィ」
瀕死の伊音を嘲りながら、女鬼たちが結女に忠告してくる。
「無粋な邪魔が入ったな。今度こそ貴様の錬気、喰らわせてもらうぞ鬼慰姫」
その背後から、阿修羅童子が迫りくる。
耳にしただけで総毛立つような声に振り向くと、その股間から並外れた大きさの男根が、天を突くようにそそり勃っていた。
「ひいっ!!　あぁあぁ、い、嫌ぁああっ！」
幾筋も血管を浮き上がらせて充血しきった幹肌は、赤銅色に染まっている。
信じられないくらい太い竿の先端で、さらに膨らんだ肉鏃の先からは、先走りの汁が勢いよく溢れ続けていた。
男の姿なら、それほど恐怖を感じなくて済んだかもしれない。しかし戦う術もなく、むしろ平均より運動能力に劣る少女の身体で、人一倍臆病な心が怯えてしまう。

えっちシーン試し読み
ここからスタート!

「ああ、阿修羅様ぁ……」
「ご立派な、おちんぽぉ」
「ふあああぁ、次はうちの膣内ぁ、突きまくって欲しいわあ」
近づくほどムンと匂い立つ獣のような牡臭に、女鬼たちがみなうっとりと顔を赤らめ、じゅわんと愛液に溢れてしまった股間を押さえ、もじもじと腰をくねらせる。
「ふむ、良い尻をしているな、鬼慰姫」
「ひゃわあっ！　はぅううっ、た、助けて……あぁ……」
修道女たちが四つん這いの背中から退くと、無敵の鬼神は結女の衣服を乱暴に剥ぎ取り、露わになった安産型の桃尻に満足げな呟きを漏らした。
「阿修羅ッ！　や、やめなさいっ」
伊音が叩きのめされる最中にも、ただ苦渋の表情で立ち尽くしていた羅刹童子が、結女の危機に進み出る。
「まだ俺から鬼慰姫を奪う気か？　ならば良いぞ、掛かってこい。相手になってやろう」
挑むかのような眼差しを同胞に向ける羅刹と、戦いを受けて立とうとする阿修羅に、鬼たちが一斉にどよめく。
だが絶対の禁忌に抗えず、羅刹童子は阿修羅から目を逸らし、呆然と俯いてしまった。
ふん、と表情を変えぬまま羅刹を嘲ると、前戯もなしにいきなり結女の女陰へと、バッ

クから怒張を押し込んだ。
「ひぁああっ、あぐっ、お、あ、あぁっ、だめっ。い、いやぁあ、そんなの、あ、あぁああっ、入らないッ。く……あぁあああぁっ!!」
まだ潤んでもいない穴口が強引に押し広げられ、無理矢理に極太な肉が埋まり込んでくる衝撃に、全身を強張らせて結女が悲痛な呻き声を上げる。
「くぅうっ、ああっ、痛いィイッ!! こんなのっ、あぐっ、ひぅぅうっ!」
狭い襞壁がメリメリと拡張されて、節くれ立った太幹に容赦なく刮げられる。
快感なんか何一つない。遼に優しくされる時と大違いな性交の痛みに脂汗が滲む。
身体が強張ると、皮肉なことに膣が一段と窄まり怒張肉との擦れ合いを苛烈にする。
「ほう、初な面をして乙女ではないうえに、なかなかの好き者のようだな。心地良く締め付けてきおって。俺の逸物がそれほど気に入ったか?」
狭く硬直して陰茎を圧迫してしまう穴壁に、鬼神がからかうような言葉を投げかける。
「ち、違……うぅ……」
「ならばもっと悦ばせてやろう。その身に充ち満ちた錬気を、歓喜と共に溢れさせろ!」
否定しようと喘ぐが、阿修羅は激しい抽送を繰り出し始めた。
ヌブッズボッズブズブズンズンズンッ! パンパンポンズパンブッズンッ!!
「ひぎぃいいっ、おあっ、あがぁあああっ!! やっ、やあっ、ああっ、だめっ、あぐ、おあ、

あぁあああっ、嫌ッ、い……やぁあ、助け……」

「結……女……!?」

容赦ないストロークに、激烈な刺激が膣内で連続して弾ける。

たまらず鳴き声混じりの悲鳴を上げる結女に、錬気を絞り取られ未だぐったりと倒れ伏す鬼斬姫が、心配の喘ぎを漏らす。

「遼……ちゃんっ。ひうっ、ん……、くぅ……はぅ、あ……ふぅ……」

必死に結女は口を噤んだ。

もう遼には心配を掛けないようにと誓ったのだ。

自分を護るため鬼斬姫になって、鬼と戦い危ない目に何度も危ない目にあってきた。

いままた結女が危ないと知れば、〝彼女〟は無理してでも阿修羅童子に立ち向かってしまうだろう。伊音ですら相手にならないほどの、恐ろしい鬼神に。

自分で戦わなければいけない。だけど、激しく膣穴を突きまくってくる怒張の衝撃に、意識を集中できず気を錬ることができない。

さらには激しい擦れ合いを和らげようと、襞壁が愛液をタップリと溢れさせて苦痛以外の心地良い感触をもたらしてきた。

くちゅ、ぬちゅ、ちゅく、ちゅぷちゅぷずちゅ、ぐちゅんッぶちゅん、ぬぶっぬぶっ！

「はぁあぁぁ、イヤぁあ、だめぇ……、エッチな、音……、ン……、遼ちゃんに、聞こえ

ちゃうぅ……。あふっ、あっ、はうっ、あぁあぁあぁっ!!」

小気味良く掻き乱される淫靡な液音が、どうしても大きく響く。

しかも鬼神の極太ペニスが襞壁とヌルヌル擦れ合う度に、背筋が浮き立つような心地よさが抑えられなくなって、はしたない喘ぎが漏れてしまう。

「はぁ〜〜、ええなあ。鬼慰姫の顔、とろっとろになっとる。うちもおっきいおちんぽイッパイに咥え込んで、気ぃ失うくらい気持ち良うなりたいわぁ」

「あはぁ、鬼慰姫、身体中に錬気が渦巻いて、どんどん膨れ上がってきてる〜。傍にいるだけで、波動がビンビン伝わってくるし〜」

「素敵ですわ、鬼慰姫。私もご相伴にあずかりたい……」

無理矢理な快感の昂りと共に、鬼族を魅了する贄としての錬気が際限なく膨れ上がり、女鬼たちが興奮して自慰に耽る。

「歓喜と共に錬気を放ち始めたか、鬼慰姫。ならば一気に達してもらおう」

甘く濃厚な牝の発情臭が漂う中、阿修羅童子が腰使いをさらに激化させた。

パンパンパンッ、ズパンッズポズポズポズムンッ、ズンッズンッズンズンズンズブンッ!!

「ふぁあぁぅうっ! あぁあはああっ、んはっ、おぉお、あぁあああっ、あうっ、はあぁぁっ、だめっ、これ、あ、あぁあぁ、だ、だめぇえっ!!」

無理矢理極太を狭穴に押し込まれ、乱暴に突きまくられた苦痛が、過剰な快感となって膣穴を蕩けさせる。こんなことなら痛いほうがまだ耐えられたと、上擦る嬌声を押し殺そうとする。

「襞が蠢いて、奥まで誘ってきているぞ。ならば存分に味わわせてやろう!!」

ズパンズパンズパンパンパンパンスパンスパンスパンパンッ!

「はひっ! ふぁああっ、あ、ああぁあっ、それ、イヤぁああっ、んおおっ、奥ッ、んあ、太いの奥にっ、く、ああっ、当たってるッ、コンコン弾いてっ、おぉああああっ、こんな……の、こんなの、いっぱい、されたらッ! ひ……、あ……、あぁあぁっ!!」

腹腔に響くほど子宮が乱打されて、息が苦しい。

錬気の流れが下腹の内の女にしかない器官で渦を巻き、突き上げられる意識と共に何倍にも膨れ上がる。

「これだめっ、やっ、あっ、あぁあぁあぁあっ、だめ、なっちゃうからぁあっ、やめ……ひうっ、あひ、ああああっ、大きく……、まだ大きくなってきてるぅうっ、わたしの、膣内……で、お、あ、あぁあぁあぁっ!」

快感に錬気が量を増すと、その錬気が今度は身体を鋭敏にさせる。

意識がどこまでも浮き上がってゆく中で、阿修羅童子の極太怒張もさらに膨張を増して激しく脈打ち始めた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/